

研究発表

研究発表 (1)

アレクサンドロス大王の父は誰かー中世スペイン語版『アレクサンドロスの書』の応答

小川 佳章 (同志社大学非常勤講師)

ラテン語および各俗語のアレクサンドロス物語において、主人公の出生の秘密は好んで取り上げられるテーマだが、その取扱い方は各版によって様々である。偽カリステネスは「大王はファラオ・ネクタボ 2 世が策を弄してマケドニア王妃の腹に儲けた婚外子である」という風聞を事実として自らの『アレクサンドロス大王伝』に取り込んだが、中世スペイン語版の第 19-20 連はこの噂の真偽について態度を保留しているようにも読める。今回の発表では 1970 年以来定説となっている「表面上両論併記しているスペイン語版の作者が実はネクネタボ父親説を否定している」という Ian Michael の解釈を再検討し、併せてスペイン語版作者が利用した資料の問題にも触れる。

研究発表 (2)

エスカリボール考：古伝語の接頭辞 es-の有無について

小沼 義雄 (早稲田大学非常勤講師)

一般的にアーサー王は「エスカリボール」という名剣の所有者として知られている。周知のように、Escalibor という綴りを確認できる最古の例はクレチアン・ド・トロワの『グラアル物語』であり、ここではアーサー王ではなくゴーヴァンが振るう名剣として僅かに言及されているに過ぎない。クレチアン以前には、ワースの『ブリュ物語』においてアーサー王はアヴァロン島で鍛えられた Calibore という名前の名剣を振っている。これはジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』における Caliburnus の設定をそのまま踏襲したものだが、問題はなぜクレチアンが es- という接頭辞をつけ、第二の主人公ゴーヴァンの愛剣として紹介しているのかという点にある。本発表は古伝語の接頭辞 es- のニュアンスから出発し、『グラアル物語』の内的コンテクストにおいてクレチアンが Escalibor をゴーヴァンの愛剣とした言語的発明について考察する。

## 講演

### 「旅立ち、アーサー王の世界へ」

斉藤洋

1952年東京生まれ。1986年『ルドルフとイッパイアッテナ』で講談社児童文学新人賞。1988年『ルドルフともだちひとりだち』で野間児童文芸新人賞。1991年「路傍の石」幼少年文学賞。2013年『ルドルフとスノーホワイト』で野間児童文芸賞。「白狐魔記」「ナツカのおばけ事件簿」シリーズ、『テーオバルトの騎士道入門』『ドローセルマイヤーの人形劇場』など、作品は300作以上。静山社よりシリーズ「アーサー王の世界」を刊行中。既刊に『大魔法師マーリンと王の誕生』『二本の剣とアーサーの即位』『ガリアの巨人とエクスカリバー』。亜細亜大学教授。